

『淮南子』の文辭について

— 漢初における諸學の統合と漢賦の成立 —

谷 口 洋

賦という文學ジャンルについて考えるとき、いわゆる屈原・荀賦の成立した戦國末から、漢賦の完成者といえる司馬相如に至るまでの時期は、極めて重要な意味をもつ。この時期の文學活動において漢の諸侯國の宮廷が大きな役割を果たしたことはつとに注意されており、賦の專著はもとより、この時期を取り扱う文學史はすべて、漢諸侯國の文學に一つの章節を割いてはいる。ただ、現存する作品の少なさのゆえに、実際にはきわめて概括的かつ抽象的な説明に終わるのが常であった。

しかし考えてみれば、新たな文學ジャンルの興起は、單に文體史における變化としてではなく、文化史全體にかかわる事件としてとらえられるべきものである。だとすれば、資料の不足を嘆く前に、なすべきことはまだまだ残されているはずである。

このような觀點に立つとき、「過去の諸思想を收束していわゆる諸子時代の終りを飾るものとしての性格を持つ」『淮南子』という書物が、漢賦の始まりを考えるにあたっても多くの材料を與えてくれることに気づく。それが「淮南王賦八十二篇」「淮南王羣臣賦四十四篇」という大量の賦作品を産み出した淮南王の宮廷で編まれたものとなればなおさらである。のみならず、『文心雕龍』が「淮南は汎く採りて文

は麗し」(諸子篇)と評したように、『淮南子』には文采に富む表現が多く、それ自體が漢賦の成立を考える手がかりともなる。このようなわけで、本稿では、『淮南子』の文章表現を検討することを通して、漢賦の成立過程をより具體的に探ろうとするものである。

なお、本稿で「漢賦」というときは、『楚辭』の體をひきつぐいわゆる騷體の賦や、先秦の四言の韻文からそのまま發展したような賦に對して、司馬相如以後の狩獵・京都賦に代表されるような、漢代になつてから新たに興つたスタイルを主として指している。しかし、これら三者の對立は決して絶對的なものではないと思われること、そして本稿で述べることは騷體賦や四言賦にもかわつてくることにより、あえて「漢賦」という大ざっぱなよび方をしていることを斷つておく

『淮南子』には漢賦に直接連なるような表現がしばしば現れるが、それらがまとまつた形で指摘されたことはあまりないようである。まずその中からいくつか拾い出して考察の手がかりとしたい。

漢代の狩獵・京都の賦では、天子の居處である苑囿や京師を、「其の東は……、其の西は……」などと述べたてるのが定型である。これ

は『史記』『戰國策』にみえる蘇秦の合縱の辭とされるものの中にも現れているが、『淮南子』にも例を求めることができる。

昔者楚之地、南卷沅湘、北繞潁泗、西包巴蜀、東裹鄧郢、潁汝以爲沘、江漢以爲池、垣之以鄧林、縣之以方城。山高尋雲霓、谿深肆無景、地利形便、卒民勇敢、較革犀兕、以爲甲冑、修鍛短鏃、齊爲前行、積弩陪後、銷車衛旁、疾如鏃矢、合如雷電、解如風雨。然而兵殆於垂沙、衆破於柘舉。

昔者楚の地は、南のかた沅湘を巻き、北のかた潁泗を繞らし、西のかた巴蜀を包み、東のかた鄧郢を裹み、潁汝以て沘と爲し、江漢以て池と爲し、之に垣するに鄧林を以てし、之に縣ぬるに方城を以てす。山は高くして雲霓に尋ぎ、谿は深くして無景を肆め、地は利にして形は便、卒民は勇敢にして、較革犀兕、以て甲冑を爲り、修鍛短鏃、齊しく前行を爲し、積弩は後に陪し、銷車は旁を衛り、疾きこと鏃矢の如く、合うこと雷電の如く、解くること風雨の如し。然れども兵は垂沙に殆うく、衆は柘舉に破らる。

(兵略)

漢賦においては、狩獵・宴會・音樂など、王侯貴族の樂しみが好んで描かれるが、『淮南子』にもそれらに言及する箇所は多い。

故雖游於江潯海裔、馳要震、建翠蓋、目觀掉羽武象之樂、耳聽滔明奇麗激滌之音、揚鄭衛之浩樂、結激楚之遺風、射沼濱之高鳥、逐苑囿之走獸、此齊民之所以淫泆流湏、聖人處之、不足以營其精神、亂其氣志、使心恍然、失其情性。

故に江潯海裔に遊び、要震を馳せ、翠蓋を建て、目に掉羽武象の樂を觀、耳に滔明奇麗激滌の音を聽き、鄭衛の浩樂を揚げ、激楚の遺風を結び、沼濱の高鳥を射、苑囿の走獸を逐うは、此れ齊民

の淫泆流湏する所以と雖も、聖人は之に處りて、以て其の精神を營わし、其の氣志を亂し、心をして恍然として、其の情性を失わしむるに足らず。(原道)

これは短い一節であるが、漢賦に描かれる快樂が列擧されており、語句のレベルでも「張翠帷、建羽蓋」「司馬相如」「天子游獵賦」「子虛上林賦」「於是乃發激楚之結風、揚鄭衛之皓樂」「枚乘」「七發」など共通するところがある。

美女の姿態を描くことは、それ自體が賦の格好の題材であるのみならず、狩獵・京都賦においても、狩の後の宴會の描寫に缺かせないものであった。『淮南子』にも、美女の描寫に力を傾けている部分がある。毛嬙や西施のような美女も、鳳や蛇の死體を身につけていたのは鼻つまみになってしまふと述べたあとで、それと對比して彼女らの美しく装った姿を述べたてる。

嘗試使之施芳澤、正娥眉、設弄珥、衣阿錫、曳齊紈、粉白黛黑、佩玉環、揄步、雜芷若、籠蒙目、冶由笑、目流眺、口曾攏、奇牙出、顰頡搖、則雖王公大人有嚴志頡頏之行者、無不憚徐癡心而悅其色矣。

嘗試に之をして芳澤を施し、娥眉を正し、弄珥を設け、阿錫を衣、齊紈を曳き、粉白黛黒し、玉環を佩ひ、步を揄ぎ、芷若を雜び、目を籠蒙し、冶由として笑ひ、目は流眺し、口は曾攏し、奇牙出で、顰頡搖かしめば、則ち王公大人の嚴志頡頏の行有る者と雖も、憚徐癡心して其の色を悦ばざること無からん。(脩務)

ちなみにこのあとには、舞の描寫や、「木熙」とよばれる輕業の描寫が連ねられ、後に傳毅「舞賦」や張衡「西京賦」でとりあげられる題材を準備している。

さて、このように快樂の限りを盡くした後で、天子が突如反省する
というのも、狩獵・京都賦のお定まりの型であるが、その原型とおほ
しきものさえも、『淮南子』の中に顔を出している。

夫建鍾鼓、列管弦、席旃茵、傅旒象、耳聽朝歌北鄙靡靡之樂、齊
靡曼之色、陳酒行觴、夜以繼日、強弩弋高鳥、走犬逐狡兔、此其
爲樂也、炎炎赫赫、恍然若有所誘、解車休馬、罷酒徹樂、而心
忽然若有所喪、悵然若有所亡也。是何則不以內樂外、而以外樂內。
夫れ鍾鼓を建て、管弦を列ね、旃茵を席き、旒象を傅け、耳に朝
歌北鄙の靡靡の樂を聽き、靡曼の色を齊ね、酒を陳ね、觴を行らし、
夜以て日に繼ぎ、強弩もて高鳥を弋し、走犬もて狡兔を逐うは、
此れ其の樂しみたるや、炎炎赫赫、恍然として誘慕する所有るが
若きも、車を解き馬を休め、酒を罷め樂を徹すれば、而ち心忽然
として喪り所有るが若く、悵然として亡う所有るが若きなり。是
れ何となれば則ち内を以て外を樂しましめず、外を以て内を樂し
ましめんとすればなり。(原道)

司馬相如「天子游獵賦」における天子の反省の場面をこれを比べれ
ば、兩者の類似に驚きを禁じ得ない。「是に於て酒は中ばにして樂は
酣なるに、天子は芒然として思ひ、亡うこと有るが若きに似たり。曰
く、嗟乎、此れ泰だ奢侈なりと。」

このように、狩獵・京都賦をはじめ、漢賦において描かれる題材
は、『淮南子』において既に出そろつてゐると言つても過言ではない。
そればかりか、これらの素材を組み合わせてより大きな單位を作るこ
とも、萌芽的な形ではあるが、『淮南子』の中に見出されるのである。
本經篇では、「凡そ亂の由りて生ずる所の者は、皆流遁に在り。流
遁の生ずる所の者は五」として、さまざまなぜいたくを列擧する。

大構駕、與宮室、延樓棧道、雞樓井幹、標棟構榑、以相支持、木
巧之飾、盤紆刻儼、羸鏤雕琢、詭文回波、洵游瀆滅、菱杼紗抱、
芒繁亂澤、巧僞紛拏、以相摧錯。此遁於木也。
大いに駕を構え、宮室を興し、延樓・棧道・鷄樓・井幹は、標棟
構榑もて、以て相支持し、木巧の飾、盤紆刻儼は、羸鏤雕琢せら
れ、詭文は回れる波のごと、洵游瀆滅として、菱杼は紗抱い、芒
繁亂澤し、巧僞は紛拏として、以て相摧錯す。此れ木に通るるな
り。

このあとにはさらに、池を築いて魚鳥を飼ひ舟遊びにふける水の流
遁、臺榭の高さや苑囿の大きさを競う土の流遁、鍾鼎の意匠にうつつ
をぬかず金の流遁、林を焼いて狩に明け暮れる火の流遁が、同様にし
て述べたてられてゆく。そして「此の五者は、一にして以て天下を亡ぼ
すに足る」として、これと對照的に質素な古の明堂について述べる。

是故古者明堂之制、下之潤溼弗能及、上之霧露弗能入、四方之風
弗能襲、土事不文、木工不斲、金器不鏤、……以示民知儉節。
是の故に古者の明堂の制は、下の潤溼及ぶこと能わず、上の霧露
入ること能わず、四方の風襲うこと能わざるのみ、土事は文ら
ず、木工は斲らず、金器は鏤めず、……以て民に示して儉節を知
らしむ。

このように、ぜいたくを盛んに述べたてたあとで、最後にそれを戒
めるのは、狩獵・京都賦に共通する大きな枠組である。そしてそれが
五という數のもとにまとめられてゐるあたりは、狩獵・京都賦の直系
の祖先ともいえる枚乘の「七發」との關連を特に強く感じさせる。實
際、兩者はほぼ同じ時期に、同じように諸侯王の宮廷で、共通する文
化的基盤の上に成立したのであり、その類似は偶然ではない。次にそ

の文化的基盤を考えていこう。

『漢書』地理志では、吳の地について述べた後に次の一段が挿入されている。

始め楚の賢臣屈原は讒を被り放流せられ、離騷諸賦を作りて以て自ら傷悼す。後に宋玉・唐勒の屬有り、慕いて之を述べ、皆以て名を顯す。漢興りて、高祖は兄の子の濞を吳に王とす。(濞は)天下の娛游子弟を招致し、枚乘・鄒陽・嚴夫子の徒、文・景の際に興る。而うして淮南王安も亦た壽春に都し、賓客を招きて書を著す。而うして吳には嚴助・朱買臣有り、漢朝に貴顯し、文辭並びに發す。故に世々楚辭を傳う。

有名なものであるが、ここから読みとれることをいま一度整理しておこう。まず一つは、『淮南子』も「七發」も楚文化の濃厚な影響下に生まれたということである。淮南國の都であった壽春は、秦によって郢を追われた楚が、最後にたどりついた所でもあった。枚乘が仕えた吳の宮廷も、巨大な經濟力を背景に、楚の東遷とともに移り來た楚辭文學の繼承者たちを大量に受け入れたであろうことは想像に難くない。要するにこれらの地域は漢初における楚辭文學繼承の中心だったのであり、枚乘の活躍も『淮南子』の成立もその中で語られているのである。

もう一つは、楚辭文學の傳承が、諸侯王の賓客と結びつけられていることである。ここに名の見える枚乘・鄒陽・嚴夫子といった人々は、諸侯の間を渡り歩いた游説の士であった。ここには、『漢書』藝文志諸子略に述べる「九家の術、鑿出し竝び作り、各々一端を引き、其の善しとする所を崇び、此を以て説を馳せ、諸侯に取合す」という戰國的狀況がまだ生きていた。『淮南子』も「七發」も、この狀況を

抜きにしては語れない。

もとより、このような狀況の作品への反映は、特に「七發」の場合には、むしろ言い古されたことに屬する。「七發」の源流として『楚辭』の「招魂」を擧げるのは、もはや文學史の常識であろう。その鋪陳のスタイルや、居室・宴會・音樂・女性美などの題材は、いずれも「七發」を経て、漢賦において展開されてゆく。それらが『淮南子』にもみられることは、これまで示してきた通りである。

戰國諸子の影響についても、諸子の總括を企圖した『淮南子』は當然としても、「七發」についても古くから指摘されてきた。章學誠が「孟子 齊王の大欲を聞いて、輕煖・肥甘・聲音・采色を歷擧せるは、七林の啓まる所なり」と言ったように、ものを列擧するのは「招魂」だけのことではなく、戰國諸子の得意技でもあった。長短の句型を織り交ぜ、輿が乗ったところで隨時押韻する「七發」の奔放な文體も、四言隔句韻の繰り返しを基調とする「招魂」よりは、むしろ戰國諸子に近い。

しかし、この際重要なのは、漢初までには両者が融合への道を歩み始めていたということだろう。『韓非子』難言篇に、説得の難しさを述べて次のように言う。

言 順比滑澤、洋洋纒纒然たれば、則ち華にして實ならずと以爲る。教祗恭厚、鯁固愼完なれば、則ち拙にして倫ならずと以爲る。多言繁稱し、類を連ね物を比ぶれば、則ち虚にして用無しと以爲る。總微説約、徑省にして飾らずんば、則ち劔ありて辯ならずと以爲る。……

ここでは「文」と「實」が對をなして列擧されてゆくが、このスタイル自體既に「順比滑澤」「連類比物」の方向にある。『韓非子』のこの

文章は、技術的には成熟の域に達していた戦國諸子の説得術に依據しながら、その技術自身が内包する自己増殖の危険性を警告しているのである。

『韓非子』には、「天下をいかに治めるか」という問題意識と、君主との緊張した關係があつた。そこでは説得の効果が何よりも重要である。しかし、天下の歸趨が決まった後に、諸侯の賓客によって書かれた『淮南子』「七發」では、説得の効果を置き去りにして、技術だけが獨り歩きすることになる。『淮南子』本經篇の引用部分や、「七發」においては、主題は「ぜいたくをするな」というあたりさわりのないことにすぎない。そこでの關心は、むしろ、一つ一つのぜいたくをできるだけ長く言い続けること、ふだん使わない難しい字を用いること、木偏や三水の字を連ねることなどに向かつている。その結果、儉約を説く主旨は吹っ飛び、漢賦の「勸百諷一」を豫告するようなことになつた。そして、ここに「招魂」との接點も生まれてくるのである。

「招魂」は、魂への呼びかけという形をとつてはいるが、決して魂という他者に對する説得の文學ではない。異界の恐怖を説き、現世の安樂を訴えるというその内容以前に、それらを述べ盡くす言葉の呪力によって魂を呼び戻すというのが、おそらくその本質であろう。しかし、時代が下ればその呪術性は忘れられ、あとには羅列による言葉の力だけが残ることになる。「招魂」の模倣的作品である「大招」で、異界の描寫が隅に追いやられ、現世の快樂の羅列が大幅に擴大されているのは、この趨勢を示すものである。それが、説得という目的を離れて自己増殖を始めた諸子の文體と結びつくのは、自然のなりゆきだつたといえよう。戸倉英美氏は、「七發」について、「諸子の文體のもつていた力強さ、齒切れのよさを取入れることにより、言葉の羅列の

呪的な力を、漢賦の世界へ移しかえた」と述べたが、同じことを『淮南子』に即して言えば、「招魂」の言葉の羅列の力を吸収することにより、諸子の文體を、漢賦の世界へひき寄せたということにならうか。

以上に述べた漢賦の成立の基盤を一言で言えば、楚文化の影響下における戦國諸子の展開と變容ということになる。ところで、ここまでは『淮南子』と「七發」の親近性を手がかりに考察を進めてきたが、『淮南子』それ自身も、この問題について多くの情報をわれわれに與えてくれている。それらは思想史上の問題でもあるが、ここでは賦の文學とのかかわりという點からこの問題をさらに追究し、漢賦の形成の一斷面を明らかにしたい。

二

『淮南子』は諸家の思想を折衷したものととして、『漢賦』藝文志以來雜家に分類されるが、その思想的基調が道家にあるのは周知の通りである。その卷頭を飾る原道篇でも、まず『老子』の道を敷衍して述べる。

夫道者、覆天載地、廓四方、析八極、高不可際、深不可測、包裹天地、稟授無形、原流泉淖、冲而徐盈、混混滑滑、濁而徐清。故植之而塞于天地、横之而彌于四海、施之無窮、而無所朝夕、舒之輒於六合、卷之不盈於一握。……

夫れ道なる者は、天を覆い地を載せ、四方に廓がり、八極に析け、高きこと際むべからず、深きこと測るべからず、天地を包裹し、無形に稟授し、原より流れ泉のごとく淖き、沖しくして徐ろに盈ち、混混滑滑として、濁りて徐ろに清む。故に之を植つれば天

地に塞がり、之を横たうれば四海に彌り、之を施せば窮り無くして、朝夕する所無く、之を舒ぶれば六合に愜い、之を卷けば一握に盈たず。……

このあとも道の性質を述べる言葉が延々と連ねられ、萬物も道によって存在することを説く。やがて道を得た「秦古二皇」の世へ話題を轉じたかと思うと、いつのまにか再び「太上之道」を説き始め、それが高潮すると、こんどは道を形容するオノマトペを連ねる。

忽兮恍兮、不可爲象兮、恍兮忽兮、用不屈兮、幽兮冥兮、應無形兮、遂兮洞兮、不虛動兮、與剛柔卷舒兮、與陰陽俛仰兮。忽たり恍たり、象を爲すべからず、恍たり忽たり、用いて屈きず、幽たり冥たり、無形に應じ、遂たり洞たり、虚しくは動かず、剛柔と卷舒し、陰陽と俛仰す。

この部分が『老子』第二十一章の「惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物」と酷似することからもわかるように、『淮南子』の文體では、『老子』的なもの、とりわけオノマトペの豊富な使用が大きな位置を占めている。

狩野直喜氏は、『老子』の文に特に「形容詞」(ここではオノマトペの類を指す)が多いことを論じている。『老子』における道は、「到底正面よりかうである」と説明する事が出来ぬから、反面なる種々の形容詞を用ゐて居る」というのである。この説明はひとまず『淮南子』にあてはめることもできるだろう。

ただ、『老子』と『淮南子』とは、オノマトペが用いられている意味が全く異なっていることは注意しておかねばならない。『老子』がその第一章において「道の道とすべきは、常の道に非ず」というように、道というものの説明不可能な性質を強調するのに對し、『淮南

子』には、その説明不可能なものを何とかして説明し盡くそうとする姿勢が顯著である。このことは、斷章の集積とさえない『老子』に對して、『淮南子』の各篇がかなりの篇幅をもち、論旨の切れ目はつきりしない文章が延々と續いてゆくことにも表れている。

仮眞篇の冒頭も、この姿勢を鮮明に示す。

有始者、有未始有有始者、有未始有夫未始有有始者。有有者、有無者、有未始有有無者、有未始有夫未始有有無者。

始めなる者有り、未だ始めより始め有ること有らざる者有り、未だ始めより夫の「未だ始めより始め有ること有らざる」こと有らざる者有り。有なる者有り、無なる者有り、未だ始めより無有ること有らざる者有り、未だ始めより夫の「未だ始めより無有ること有らざる」こと有らざる者有り。

一見してわかる通り『莊子』齊物論の一節によつたものであるが、その後には續く内容は正反對と言つてよいほど異なっている。『莊子』では、「俄かにして有無あり、而して未だ有無の孰れか有にして孰れか無なるを知らざるなり」といい、有と無との區別の相對性と、そのように相對的に規定された概念の無内容さとを説くのだが、『淮南子』においては、「始め」とは何か、「未だ始めより始め有ること有らざる者」とは、どういう状態かということ、いちいち説明しようとするのである。

所謂有始者、繁憤未發、萌兆牙孽、未有形埒、無無螟螟、將欲生與而未成物類。有未始有有始者、天氣始下、地氣始上、陰陽錫合、相與優游競暢于宇宙之間、被德含和、續紛龍菴、欲與物接而未成兆朕。……

所謂始めなる者有りとは、繁憤未だ發せず、萌兆牙孽、未だ形

母有らず、無無顛顛として、將に生與せんと欲すれども未だ物類を成さざるなり。未だ始めより始め有ること有らざる者有りとは、天氣始めて下り、地氣始めて上り、陰陽錯合し、相與に宇宙の間に優游競揚し、徳を被り和を含み、繽紛龍菴し、物と接せんと欲すれども未だ兆朕を成さざるなり。……

これこそ正面からは説明できないものであるから、多くのオノマトペが用いられているが、それらは『老子』におけるような判断中止を示すものではなく、あくまで対象を述べ盡くすための手段なのである。すべてを説明し盡くそうとする態度は、『淮南子』全體の後序にあたる「要略」にまで浸透している。

夫道論至深、故多爲之辭、以抒其情。萬物至衆、故博爲之說、以通其意。辭雖壇卷連漫、絞紛遠緩、所以汰汰滌蕩至意、使之無礙竭底滯、捲握而不散也。

夫れ道論は至りて深し、故に多く之が辭を爲して、以て其の情を抒ぶ。萬物は至りて衆し、故に博く之が説を爲して、以て其の意を通す。辭は壇卷連漫し、絞紛遠緩すると雖も、至意を汰汰滌蕩し、之をして礙竭底滯すること無く、捲握して散ぜざらしむる所以なり。

おそらくは既にまとめ上がった書物を前にして、その浩瀚さを誇示する気持ちもあるのだろうが、なぜこれだけの言葉を費して書を著したのかということや、やはり多くの言葉を費して滔々と述べたてる。そしてここでも、「壇卷連漫、絞紛遠緩」のようなオノマトペを用いている。さらにこの後では、全二十篇の論に通じた者を形容して、「曼兮挑兮、足以覽矣、藐兮浩兮、曠曠兮、可以游矣」とうたいあげるのである。ここでの文體と構成は、先に掲げた原道篇の冒頭と全く同じ

である。

このように、オノマトペを豊富に用いて延々と續く『淮南子』の文體は、すべてを述べ盡くそうとする精神によって支えられている。それが漢賦に受け継がれてゆくことについては、もはや多言を要しまい。ここではただ、「七發」の觀濤の段の一節を示すにとどめる。

至則未見濤之形也、徒觀水力之所到、則卹然足以駭矣。觀其所駕軼者、所擢拔者、所揚汨者、所溫汾者、所滌沓者、雖有心略辭給、固未能縷形其所由然也。况兮忽兮、聊兮慄兮、混汨汨兮、忽兮慌兮、倏兮儻兮、浩瀆濊兮、慌曠曠兮。

至れば則ち未だ濤の形を見ざるなり、徒だ水力の到る所を觀れば、則ち卹然として以て駭くに足る。其の駕軼する所の者、擢拔する所の者、揚汨する所の者、溫汾する所の者、滌沓する所の者、觀れば、心略辭給有ると雖も、固より未だ其の由りて然る所を縷形する能わず。(以下訓讀は略す)

『淮南子』では道が水のイメージに託して語られたが、ここでは同様の表現が水そのものの描寫に用いられている。「固未能縷形」という文字づらとはうらはらに、全體は水のさまを「縷形」するさまざまを試みで充たされる。

さて、『老子』に基づきつつも、『老子』とは全く異なる精神によって支えられている『淮南子』の文體は、どのようにして成立したのだろうか。それを考えるには、戦國末から漢初に至る間の『老子』の展開にふれなければならぬ。

戦國諸子の文章は、問答體をとるものが少なくなく、そうでないものも、何らかの形で受け手に對する説得としての面をもつのが普通である。それは當然、自らの主張を言葉によって明らかにしようとする

態度を導く。ところが、『老子』という書物には、そのような論争的要素が全くない。固有名詞が一切用いられず、獨り「我」だけが語り續けるその世界は、ひとつの自閉した言語空間を形づくっている。しかし、戦國末になって學派間の交渉が盛んになる中で、『老子』の哲學も、自らを外に向かつて説明する必要が生じてくる。こうして、『老子』を敷衍し宣揚する文章がさまざまな形で産み出される。『淮南子』も、その流れに連なるものである。

金谷治氏の指摘によれば、『淮南子』自身の中に、『老子』に對する二つの異なる態度があるという。一つは、短い説話によって『老子』の言の正しさを證する道應篇のように、『老子』の言葉を金科玉條と奉ずる態度である。もう一つは、『老子』と密接な關係を保ちつつも、引用という形をとらずに、むしろ『老子』の言葉を自由に取り込んで増殖するようなゆき方である。ここで論じている原道篇などは、まさにその典型である。

これを文體の面から見ると、前者の場合には、説話という既成のスタイルに、『老子』の文がそのままの形ではさみ込まれるだけであるから、そこから新しいものが生まれることはない。しかし後者の場合は、断片的な『老子』の言葉が擴大されることで、自立した一つのスタイルを獲得することになる。『老子』の大部分は韻文であるから、その擴大は當然長篇の韻文となる。ここで引用した中にもそうした例はあり、それらと漢賦との親近性は、「七發」との比較によって示した通りである。

この流れが賦にまで到達した例としては、賈誼の「鵬賦」なども含め得るのである。この賦は楚辭文學の展開という文脈の中で語られることが多い。それも一理あるが、賦の内容を見ると、老莊の言を隨

所で繰り返すばかりで、楚辭文學本來の要素はあまり顯著ではない。「○○○○兮、○○○○」という、奇數句に兮字を用いた四言の文體も、岡村繁氏が指摘するように、本來の楚辭文學にほとんど例を見ない變則的なものである。さらに、『漢書』の引用では、この兮字がすべて取りはらわれ、普通の四言體となっているのである。四言の韻文は、『老子』においても普通に見られるものであるから、『漢書』での「鵬賦」は、いかにも『老子』がそのまま擴大されたという印象を興える。もちろん、この賦には『莊子』の影響も大きく、吉凶禍福を問うという設定には『楚辭』「卜居」との關連も想定できるなど、一筋縄ではいかないところもある。それでも、漢初における『老子』の展開と賦の文學とのかわりを示す一例とはいえよう。

しかし、「鵬賦」のような四言體は、後の漢賦で主導的地位を占めるものではない。『淮南子』や「七發」のような、オノマトペに富む饒舌體ではない。その内容も、確かに一つの主題をさまざまに述べてはいるが、すべてを述べ盡くそうとするものではない。『老子』と『淮南子』の文體には、單なる量的な擴大にとどまらぬ質的な差異があり、それは兩者の思想の差異ともかわるのである。

天下統一への動きに呼應して、戦國末以降には、思想界でも統合や折衷の動きが盛んであった。『淮南子』もその試みの一つであるが、その理論的支柱となつたのは、『老子』に基づきつつそれとは異なる道の哲學である。

『淮南子』における道は、原道篇の冒頭で水のイメージに託して語られていたように、一つの實體として現れる。それは『老子』に「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は萬物を生ず」というような、萬物を生成する母體としての道の姿を受け継ぐものである。

しかし原道篇の「包裹天地、稟授無形」「與剛柔卷舒兮、與陰陽俛仰兮」などの表現は、道がどこにでも宿ることをいうようでもある。それはむしろ、『莊子』齊物論篇に「恢愴憮怪、道は通じて一と爲す」というような、萬物の背後に存在する理法としての道のあり方である。

道が萬物を生む實體であり、かつその萬物の背後にひとしく存在する理法でもあるということになると、道は萬物を包攝する實體であると言ってもさしつかえない。ならば、自らが道の立場に立つ限り、雑多な萬物は雑多なまま包攝されることになる。むしろ、雑多なものが集められていることが、道の根源性の證明となるのである。「要略」で「道論至深」と「萬物至衆」が並列されていたことは、この點をよく示している。説明不可能な道を奉じる『老子』の寡黙から、すべてを述べ盡くす『淮南子』の饒舌への變貌には、このような道家思想の展開がかかわっていたのである。

この道の哲學は、それ自身老莊の折衷であるが、同時に、『淮南子』が各種の思想を折衷する基盤ともなった。相矛盾する思想も、ここでは問題にならず、内容の豊富さ・完全さを示すものとして、むしろ誇りにすらなる。司馬談の「六家要旨」に道家を論じて、「陰陽の大順に因り、儒・墨の善を采り、名・法の要を撮り、時と與に遷移し、物に應じて變化す」というが、この言葉は『淮南子』にこそふさわしい。ここにおいて、道家のみならず、前節で論じたような他の戰國諸子の説得の文體も、大量に入り込んでくることになる。

『淮南子』の思想は、篇ごとにそれぞれの特色をもっている。本節で論じた原道・俶眞などの篇は、かなり純粹な道家説であり、それにふさわしい文體をもつが、他にも儒家的な篇や法家的な篇もあり、それに應じて文體も異なる。原道篇一つをとっても、冒頭では『老子』

の擴大であるが、すぐに同じ道家でも『莊子』的な文體に轉じ（後述）、さらには前節でいくつか引用したような説得の文體も現れる。要するに完全な融合には至っていない。ただ、いずれもその文體より擴大した饒舌體である點は共通している。このことは、やがてそれが融合して漢賦という新しい文體となる方向を暗示するものである。

漢初における思想界の統合の動きが漢賦の形成にかかわっていることは、陸賈の撰とされる『新語』にもうかがえる。『新語』は傳統的には儒家に分類されるが、漢初の黃老思想の影響をうけて、『老子』的なものの混入が著しい。巻頭の道基篇からして既にそうである。

傳曰、天生萬物、以地養之、聖人成之。功德參合、而道術生焉。

故曰、張日月、列星辰、序四時、調陰陽、布氣治性、次置五行、

春生夏長、秋收冬藏、陽生雷電、陰成霜雪、養育羣生、一有一亡。

傳に曰く、天は萬物を生じ、地を以て之を養い、聖人之を成すと。功德參合して、道術生ず。故に曰く、日月を張べ、星辰を列ね、四時を序し、陰陽を調え、氣を布き性を治め、五行を次置し、春は生じ夏は長じ、秋は收め冬は藏れ、陽は雷電を生じ、陰は霜雪を成し、羣生を養育し、一には有り一は亡し。

冒頭の「傳曰」以下が『荀子』富國篇の「天地生之、聖人成之」と似ることからわかるように、ここで述べられるのは道家の道というよりは儒家の天の姿である。しかし、自由に押韻しながら延々と續くその文體は、『淮南子』原道篇冒頭のそれを思わせる。そもそも、著述の第一篇において、萬物を生成する主體についてながながと説き連ね、それに「道基」という篇名をつけること自體、多分に『老子』的である。

資質篇の冒頭も、『新語』の文章の特色をよく示す。「樵枿豫章」のような名木も、見出されれば人に用いられることができるが、誰にも知られなければそのまま朽ち果てるよりない。これは『莊子』人間世篇や山木篇の「不材の木」の語を用いたものだが、『莊子』では「不材」なるがゆえに自己を全うできると説いていたのが、ここでは儒家がしばしば論じてきた「窮」と「通」の問題におきかえられている。これまた『新語』の儒道折衷の一例であるが、それはさておき、ここで注目したいのはその文章である。

及隘於山阪之阻、隔於九峘之隄、仆於鬼嶽之山、頓於宵冥之溪、樹蒙龍蔓延而無間、石崔嵬嶄岩而不開、廣者無舟車之通、狹者無步擔之蹊、商賈所不至、工匠所不窺、知者所不見、見者所不知、功棄而德亡、腐朽而枯楊、轉於百仞之壑、惕然而獨僵、當斯之時、不如道傍之枯楊。

山阪の阻に隘せられ、九峘の隄に隔てられ、鬼嶽の山に仆れ、宵冥の溪に頓るに及びては、樹は蒙龍蔓延して間無く、石は崔嵬嶄岩として開けず、廣き者も舟車の通無く、狹き者は步擔の蹊無く、商賈の至らざる所、工匠の窺わざる所、知者の見ざる所、見者の知らざる所、功は棄てられ徳は亡び、腐朽して枯傷し、百仞の壑に轉じ、惕然として獨り僵る。斯の時に當たりては、道傍の枯楊にも如かず。

長短句の自由な押韻、オノマトペの多用、草冠・山冠の字の列擧など、漢賦の特徴が既に備わっていることに気づくだろう。『漢書』藝文志詩賦略では賦を四種に分かつが、第二類の筆頭に擧げられるのが「陸賈賦三篇」である。『新語』の文章は、今は失われた陸賈の賦篇をしのばせるものがある。

枚乘「七發」の結びでは、「莊周・魏牟・楊朱・墨翟・便娟・詹何の倫」に天下萬物を論じさせ、「孔・老は覽觀し、孟子は籌を持ちて之を籌う」というところで太子の病が治って暮となる。思想家の名を列擧しただけと言えどもそれまでだが、諸家の學の融合が漢賦の文體をつくったということを頭において讀むと、また味わい深いものがあるといえないだろうか。

ところで、ここまで考察の対象としてきた『老子』『新語』『淮南子』の三者には、一つ共通点がある。『老子』は楚の文化圏から出たものである。『新語』の撰者とされる陸賈は楚の人である。『淮南子』は楚の最後の都のあった所で編まれた。つまりこれらの書はみな楚の文化圏で産み出されたわけで、その共通性は音韻學的研究によっても確かめられている。

ここで思い合わされるのが、先にふれた、『老子』の展開の二つの類型である。『老子』の言の正しさを論證しようとする『淮南子』道應篇のゆき方は、『韓非子』の喻老・解老兩篇を受け継ぐものである。このような試みがまず法家の書である『韓非子』においてなされたことには注意する必要がある。それは法家という「説得の言語」による『老子』のとりこみといえるが、同時に、戰國説得術という中原の文化による楚文化のとりこみと言うこともできるだろう。それに對し、『老子』が楚の文化圏の中で成長していった姿が、『鵬賦』や『淮南子』原道篇のような、『老子』の語を用いつつ自由に増殖するスタイルなのではないだろうか。おそらく、その最も純粹な形は「鵬賦」に近いもので、『新語』や原道篇は、漢初の道家思想の變容を反映した形であろう。もしこの考えが正しいなら、ここにも、漢賦の成立に果たした楚文化の役割の大きさを指摘できるのである。

しかし、楚文化との関連では、やはり『楚辭』との結びつきを検證すべきであろう。「招魂」については既にふれるところがあつたが、「楚辭」のもう一つの代表作である「離騷」とのかかわりを、最後に考えてみよう。

三

「離騷」が漢代の文學に大きな影響を與えたことは、今さら言うまでもなからう。その天上遊行のモチーフは、中でも特に愛好されたものである。

騶玉虬以乘鸞兮、溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃。……前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬。鸞皇爲余先戒兮、雷師告余以未具。

玉虬を騶として以て鸞に乘り、溘ち埃風ありて余上征す。朝に軔を蒼梧に發し、夕に余は縣圃に至る。……望舒を前にして先驅せしめ、飛廉を後にして奔屬せしむ。鸞皇余が爲に先に戒め、雷師余に告ぐるに未だ具わらざるを以てす。

このモチーフは『楚辭』の模倣的作品、例えば「遠遊」などに引き繼がれる。従つて、その「遠遊」を下敷きにしたともいわれる司馬相如の「大人賦」に天上遊行が描かれるのも、自然なことといえよう。

悲世俗之迫隘兮、搴輕舉而遠遊。垂絳幃之素蜺兮、載雲氣而上浮。……駕應龍象輿之躡略逶麗兮、驂赤螭青蚪之蝟蟪蜿蜓。低昂天矯据以驕驚兮、訕折隆窮蠅以連卷。

世俗の迫隘を悲しみ、搴りて輕舉して遠遊す。絳幃の素蜺を垂れ、雲氣に載りて上浮す。……應龍象輿の躡略逶麗たるを駕し、赤螭

『淮南子』の文辭について

青蚪の蝟蟪蜿蜓たるを驂とす。低昂天矯として据りて以て驕驚とし、訕折隆窮として蠅びて以て連卷たり。

「離騷」の型を踏襲しつつ、オノマトペを驅使していっそう華麗なものとしているのがわかるだろう。

ところで、司馬相如は、「離騷」とは全く異なる文體である「天子游獵賦」においても、やはり天上遊行のモチーフを用いている。天子の上林苑での狩の場面を見てみよう。

於是乎背秋涉冬、天子校獵。乘鑣象、六玉蚪、拖蜺旌、靡雲旗、前皮軒、後道游、孫叔奉轡、衛公駮乘、虬從橫行、出乎四校之中。……軼赤電、遺光耀、追怪物、出宇宙。……然後揚節而上浮、陵驚風、歷駭颺、乘虛無、與神俱。

是に於てか秋に背き冬に涉り、天子は校獵す。鑣象に乗り、玉蚪を六にし、蜺旌を拖ぎ、雲旗を靡かし、皮軒を前にし、道游を後にし、孫叔は轡を奉じ、衛公は駮乘し、虬從は横行して、四校の中より出ず。……赤電を軼ぎ、光耀を遺し、怪物を追い、宇宙より出ず。……然後に節を揚げて上浮し、驚風を陵ぎ、駭颺を歷、虚無に乗り、神と俱にす。

楚辭文學において盛んに用いられていたこのモチーフを異なる文體に移植したのは、しかし相如の獨創ではない。『淮南子』にも、その例は随所に見られるのである。

昔者馮夷大丙之御也、乘雷車、六雲蜺、游微霧、驚忽恍、歷遠彌高以極往、經霜雪而無迹、照日光而無景、扞扶搖抱羊角而上、經紀山川、蹈騰昆侖、排閭闔、淪天門。

昔者馮夷・大丙の御するや、雷車に乗り、雲蜺を六とし、微霧に遊び、忽恍に驚せ、遠きを歴高きに彌りて以て往を極め、霜雪を

經れども迹無く、日光に照らさるれども景無く、扶搖を拵ぎ羊角を抱きて上り、山川を經紀し、昆命を蹈騰し、閭闔を排き、天門に淪る。(原道)

若夫真人、則動滂于至虛、而游于滅亡之野、騎蜚廉而從敦圜、馳於外方、休乎内宇、燭十日而使風雨、臣雷公、役夸父、妾宓妃、妻織女。天地之間、何足以留其志。

夫の真人の若きは、即ち至虚に動滂して、滅亡の野に遊び、蜚廉に騎りて敦圜を従え、外方に馳せ、内宇に休み、十日を燭として風雨を使とし、雷公を臣とし、夸父を役とし、宓妃を妾とし、織女を妻とす。天地の間、何ぞ以て其の志を留むるに足らんや。

(倣眞)

覽冥篇においては、このモティーフがいくつも組み合わされていゝる。まず赤螭・青虬の游行や鳳凰の飛翔が輝かしく描かれ、それによつて他の動物たちが沈黙することを述べる。次いで「車に上りて轡を攝れば、馬は整齊して斂諧するを爲し、足を投げて調は均しく、勞逸一なるが若し」という王良・造父の御が描かれるが、それは「未だ其の貴なる者を見ざるなり」であるとして、「御せざるを以て之を御す」という理想の境地を描く。

若夫鉗且大丙之御也、除轡銜、去鞭棄策、車莫動而自擧、馬莫使而自走也。日行月動、星耀而支運、雷奔而鬼騰、進退屈伸、不見朕垠。

若し夫れ鉗且・大丙の御するや、轡銜を除き、鞭を去り策を棄て、車は動かすこと莫くして自ら擧がり、馬は使うこと莫くして自ら走るなり。日のごと行き月のごと動き、星のごと耀きて玄のごと運り、雷のごと奔りて鬼のごと騰り、進退屈伸して、朕垠を

見す。

このような非騷體による天上遊行の點出は、さらにさかのほれば、『莊子』逍遙遊篇にゆきつく。

有鳥焉、其名爲鵬。背若泰山、翼若垂天之雲。搏扶遙羊角而上者九萬里、絕雲氣、負青天、然後圖南、且適南冥也。

鳥有り、其の名を鵬と爲す。背は泰山の若く、翼は垂天の雲の若し。扶遙羊角に搏きて上る者は九萬里、雲氣を絶え、青天を負い、然る後南せんと圖り、且に南冥に適かんとするなり。

夫列子御風而行、冷然善也。……此雖免乎行、猶有所待者也。若夫乘天地之正、而御六氣之辯、以遊无窮者、彼且惡乎待哉。

夫れ列子は風を御して行き、冷然として善きなり。……此れ行くことを免ると雖も、猶お待つ所有る者なり。若し夫れ天地の正に乘りて、六氣の辯を御し、以て无窮に遊ぶ者は、彼且た悪くにか待たんや。

「扶搖」「羊角」などの語において、また理想の得道者を天上遊行によつて表現するその發想において、『淮南子』につながるものがある。

このように、天上遊行のモティーフには、「離騷」「遠遊」の騷體の系譜と、『莊子』『淮南子』の非騷體の系譜とがある。それらは、司馬相如の作品に見るように、それぞれ騷體の賦と非騷體の賦とに連なるのである。

もっとも、この二つの系譜は、發展の過程で絶えず混じり合つてきた。「離騷」の系譜をひく「遠遊」は、一方で『莊子』の語を大量に用い、「老莊の哲學を辭賦の文學形式を借りて表現したもの」とさえいわれるし、「大人賦」でも事情は同様である。『莊子』の系譜においても、『淮南子』倣眞篇には「離騷」に描かれた「蜚(飛)廉」「雷公

〔雷師〕などの神話的人物が顔を出しているし、「天子游獵賦」での天子が六頭の虬きゅうに曳ひかれた車くるまで出陣する姿は、「離騷」の「駟玉虬しよきゅう以乘鸞しやうらん兮」の擴大とも解し得る。

『莊子』と『楚辭』はともに楚の文化に根ざしたものであり、特に『離騷』は、超越的な理想的人格を描く點で『莊子』に通じるものがあるから、兩者がその展開の過程で混じり合うのは自然なことである。ただここで指摘しておきたいのは、その過程で無韻であった『莊子』が韻文化し、『淮南子』覽冥篇の引用箇所は無韻だが、その前後は押韻する。句型も整えられて、文藝化の方向に進んでいることである。司馬相如らの非騷體の賦の文體の形成には、楚辭文學との交渉による『莊子』の文藝化ということも、大きくかかわっているのである。

この點を示す興味深い資料を一つ補っておこう。一九七二年に山東省臨沂の銀雀山漢墓で出土した「唐勒」殘簡である。

唐革與宋玉言御襄王前。唐革先得曰、人謂就父登車噉た、馬汁險けん、周均不擊、步趨……(下缺)

唐革(勅)と宋玉と御を襄王の前に言す。唐革先ず得(稱)して曰く、人謂えらく就(造)父車に登り噉(嚙)を噉(攪)れば、馬は汁(協)險(斂)正(整)齊し、周(調)は均しくして擊しからず、步趨……(第一八三簡)

月行而日遠、星隴而文慎、子神賁而鬼走、進退詘信、莫見其墳、埃、均□……(下缺)

月のごと行きて日のごと遠き、星のごと隴りて女のごと慎(運)り、子神のごと賁(奔)りて鬼のごと走り、進退詘信(屈伸)し、其の墳(塵)埃を見ること莫く、均□……(第二〇四簡)

『淮南子』の文辭について

一見してわかる通り、先に掲げた『淮南子』覽冥篇の文と酷似している。またこれらの殘簡は武帝期の貨幣と同時に出土しており、『淮南子』の成立とほぼ同じ時期に、同じような形で『莊子』を敷衍した文章があったことがわかる。断片であるから韻文かどうかは判断しかねるが、『淮南子』との類似からみても、文飾に富んだものであったことは想像に難くない。そして注意すべきは、これが唐勒・宋玉の名に託して語られていることである。既に引いた『漢書』地理志に示されたように、この二人は屈原の後繼者と目されていた人物である。このことは、『莊子』の展開過程における楚辭文學の要素の流入をよく示している。

超越者の姿を美しく描く『莊子』は、それ自體文學的要素をもっているが、その要素は、楚辭文學との結びつきによって開花したといえる。淮南の宮廷こそ、その開花にふさわしい苗床であったことは、以下に挙げる多くの事實から確かめられる。

『文選』李善注の引用によれば、『淮南王莊子略要』『淮南子』(王)の誤りか)『莊子后解』などの書があったことが知られる。また、『淮南子』道應篇は、『老子』の語を説話によって證明する體裁をとるが、その中で、『莊子』の説話を用いた例や、『老子』に代えて『莊子』を引用した例がある。『淮南子』「要略」の作者もこの點に留意したのか、道應篇の意を説いて「老莊の術に考驗す」という。この言葉は、「老莊」連稱の最も早い例とされ、かつ漢代におけるほとんど唯一の例として一般に知られる。そもそも、『老子』の道を祖述する原道篇と、『莊子』の眞を敷衍する傲眞篇(それぞれの冒頭を想起された)とを巻頭に並べ配する『淮南子』の構成自體、老莊を一つの場において統一しようとする意圖が見える。

漢初の道家思想は、『史記』において「黃老」「黃帝老子」とよばれるように『老子』が中心であり、『莊子』はむしろ影の薄い存在であった。もちろん、そのような中にあつても原『莊子』が發展を續けていたことは、『莊子』外雜篇の内容が如實に示している。しかし、淮南における『莊子』への關心の高さは、やはり突出していたといわねばなるまい。

一方、淮南王のもとでは、「楚辭學」とでも呼べるようなものも榮えていたようである。『漢書』淮南王安傳に、武帝が安に「離騷傳」を作らせ、安は「且に詔を受け、日食時に上る」という速筆で應じたことを載せる。この「離騷傳」については、「離騷賦」とする傳承もあり、王念孫『讀書雜誌』では制作時間の短さから考えて「賦」が正しいとするが、小南一郎氏は、王逸『楚辭章句』に押韻する部分があるのをヒントに、安が作ったのは韻文の注であつて、「注釋者の自由な文學的發想を盛り込むことを許すもの」であつたと推測する。いずれにせよ、淮南王のもとでは、「離騷」の解釋と敷衍が行われていたのである。「淮南小山」の名で傳わる「招隱士」も、「招魂」の解釋と敷衍の結果といえよう。淮南における『楚辭』は、他の諸子と同様、一つの學問であつたといえるかもしれない。

戰國諸子の統合をめざした『淮南子』は、『莊子』を取り込むことによつて、それと結びついた形で楚辭文學をも、いわば「一家の學」として取り込んだのである。ここでとりあげた天上遊行に限らず、『淮南子』にひろくみられる華麗な文體は、このような意味での楚辭文學の取り込みを反映するものであろうし、逆にいえば、戰國の「一家の學」が、楚の文化の中で文藝化してゆく姿でもあろう。『藝文類聚』卷八九に引く「成相篇」に、「莊子貴支離、悲木植」とあり、

原注に「成相、淮南王所作也」という。「成相」は『荀子』にも收める韻文で、楚辭文學との關係がはっきりしないうらみはあるが、淮南における『莊子』の流行とその文藝化を象徴するようなことがらとはいえまいか。

美しい言葉を並べることがそれ自體一つの快感であり、そこに文學を誕生させる契機の一つも存する。前二節にわたつて述べてきたように、戰國諸子の文體は、漢初における展開の中で、既にそうした文藝化の道を歩みつつあつた。しかし、その方向を決定的なものにし、漢賦という新しい文學への方向づけをしたのは、ここに述べたような『莊子』と楚辭文學との結びつきであらう。漢賦の形成において、淮南を含む楚の文化圏が果たした役割は、まことに大きいと言わねばなるまい。

章學誠『校讐通義』漢志詩賦の條に、次のような言葉がある。

古の賦家者の流は、詩・騷に原本し、戰國諸子に出入す。問對を假設するは、莊・列が寓言の遺なり。聲勢を恢廓するは、蘇・張が縱横の體なり。諧隱を排比するは、韓非が儲説の屬なり。材に徴し事を聚むるは、呂覽が類輯の義なり。……實に能く自ら一子の學を成す。夫の専門の書と、初めより差別無し。

戰國諸子の特徴を集成した「一子の學」という、章氏の賦に對する見方は、司馬談の道家に對する定義を想起させる。ここに擧げられた一つ一つの事柄もさることながら、それらを統合しようとする動きこそ、漢賦を成り立たせる力となつたことを、章氏は主張しているのではなからうか。

ところで、このような諸學の統合への動きは、何も淮南にだけあつ

たのではない。「管子」にみられる齊での動きは、近年注目を集めているし、董仲舒に至る儒家の展開も、同じ流れの中で理解できよう。ただ、淮南を中心とする楚の地域では、それが文藝化の方向をたどったところに、際立った特色があった。「淮南子」の述作にも「淮南王臺臣賦四十四篇」の作者たちがかわっていたのではないかという推測は、大いにうなずけるものである。

やがて淮南も呉も取りつぶされ、政治的には、長安—儒家の優位が決定する。しかし、「淮南子」が残したものは、文學の世界では、その長安の宮廷を漢一代にわたって制壓し続けることになるのである。

注

- (1) 金谷治『秦漢思想史研究』（日本學術振興會、一九六〇）五五六頁。
- (2) 『漢書』藝文志詩賦略。これをしのぐ多作は武帝期の「枚臬賦百二十篇」のみである。
- (3) 以下『淮南子』の引用は劉文典『淮南鴻烈集解』による。ただし、『集解』所引の諸説及び楠山春樹『淮南子』（明治書院『新釋漢文大系』三冊、一九七九—八八）によってかなりの文字を改めたが、いちいち注記しない。
- (4) 高注に、「流、放也。遁、逸也。」
- (5) 岡村繁「漢初における辭賦文學の動向」『鳥居久靖華甲紀念論集・中國の言語と文學』一九七二、六三—六四頁。
- (6) 枚乘については與論宏「宮廷文人の登場——枚乘について」（『文學』四五—一一、一九七七）、鄒陽については福井佳夫『「上奏文」の文體について——鄒陽の『獄中上書自明』を中心に』（『日本中國學會報』三五、一九八三）が、それぞれの「遊説の士」としてのあり方とその作品との關係を論じている。

『淮南子』の文辭について

(7) 章學誠『文史通義』詩教上。「孟子」梁惠王上の「爲肥甘、不足於口與、輕煖、不足於體與。抑爲采色、不足視於目與、聲、音、不足聽於耳與、便嬖不足使令於前與」をふまえる。また『隋書』經籍志集部總集類に「七林十卷、卜景撰」があり、漢魏六朝における「七」の體の流行をしのばせる。

(8) 戸倉英美『詩人たちの時空——漢賦から唐詩へ』（平凡社、一九八八）一八頁。

(9) 狩野直喜『支那文學史』（みすず書房、一九七〇）一六一—六二頁。

(10) 楠山氏は『淮南子』譯注の準備作業である本文の分節の困難さによれ、その原因を論旨の切れ目なく延びてゆく『淮南子』の文體に求められている（前掲書・上、はしがき）。

(11) 金谷、前掲書、二〇五頁以下。

(12) 岡村、前掲論文、六〇—六二頁。岡村氏はこれを『楚辭』と北方詩歌の混合とする。

(13) 實は「弔屈原賦」にも「鵬賦」と同じ句型はあるのだが、こちらは『漢書』においても今字が保存されているから、班固は兩者を別の文體と見ていたことになる。

(14) 金谷、前掲書、四八九—五〇四頁参照。

(15) 引用は王利器『新語校注』（中華書局、一九八六）による。「有」はもと「茂」に作るが、王氏の案語により改める。

(16) 羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一分冊（科學出版社、一九五八）で、陽東相押・耕眞相押等の共通點を擧げ、楚方言の特徵とする（八一—八二頁）。なおこの點は、京都大學の平田昌司氏の御教示を頂いた。

(17) 司馬相如の賦の引用は一律に『史記』（中華書局標點本）本傳による。

(18) 金谷、前掲書、四四〇頁でも言及するが、漢賦とのつながりにはふ

れていない。

- (19) 福永光司『「大人賦」の思想的系譜——辭賦の文學と老莊の哲學』『東方學報』京都四一、一九六五、一〇三頁。
- (20) 引用は吳九龍『銀雀山漢簡釋文』（文物出版社、一九八五）による。
- (21) 「遠」は字義未詳。とりあえず『淮南子』覽冥篇の「日行月動」に従って讀んでおく。
- (22) 前者は卷二六謝靈運入華子崗詩・卷三一江淹雜體詩（許徵君）・卷四五陶淵明歸去來（『淮南子要略』と誤る）・卷六〇任昉齊竟陵王行狀注に引く。後者は卷三五張協七命注。
- (23) 例えば、冒頭には『莊子』知北遊篇に見える太清と無窮の會話を用い、終わり近くでは「莊子曰」として逍遙遊篇の「小知不及大知、小年不及大年」を引く。
- (24) 楠山、前掲書・上、倣眞篇解說、八三頁。
- (25) 荀悅『漢紀』、高誘『淮南鴻烈鈔』など。
- (26) 小南一郎『王逸』楚辭章句』をめぐって——漢代章句の學の一斷面』『東方學報』京都六三、一九九一、一〇〇頁。これによると、「離騷」を敷衍した韻文が「傳」とも「賦」ともよばれたことになり、『老子』と「鵬賦」や「新語』『淮南子』との關係を思うと興味深い。
- (27) 楚と「成相」の關係を示す例としては、湖北省雲夢で出土した秦簡「爲吏之道」と『荀子』成相篇との句型の共通性が一應指摘できる。
- (28) 楠山、前掲書・上、解題、一一頁。